
ムーンライト・シンデレラ

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンライト・シンデレラ

【Nコード】

N4771C

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

月明かりに照らし出されるその人は、とても美しかった。その日出会ったその人は儂く、美しく、眩しかった。僕は光り輝くものに惹かれずにはいられない、そういう生き物だから。

輝く存在には惹かれずにはいられない。
僕らはそういう生き物なのだから。

その人は、とても美しかった。

月明かりに照らされながら立つその姿は凛々しく、空気を浄化していくようで、輝いているようで、思わず引き寄せられるようにその人に近づいた。

白い白いその肌から漂う甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「珍しいお客様だわ。どうしたの？」

僕を見つけたその人は、美しい声でそう問いかけてきた。

その人の前では自分はとても小さな存在のように感じて、その美しい声に答えることが躊躇われた。

闇夜に紛れるように去ろうとすると、呼び止められた。

「行ってしまふの？ 少しくらいお話ししようよ。夜はまだまだ長いでしょう？」

にっこりと微笑んだ時の魅力には勝てず、そっとその人の側まで近づく。

「こんばんわ、良い夜ね」

「……こんばんわ。最近この辺りへ？ 貴女のような人を今まで見た記憶はないんだけど」

すぐ触れられそうな位置にいらながらも触れることなんてできず、

挨拶のついでに疑問を口にした。

「いいえ。でも気づかなくても仕方ないわ。私ずっと地味だったから」

目の前の美人にそんなことを言われて、信じることができるだろうか？

彼女の肌は透き通るように白く、長い緑の黒髪も艶やかだ。色彩的には地味かもしれないが、何よりも彼女の美しさに気づかないはずがない。

「本当に？」

「ええ、もう何年もここにいるわ。信じられないって顔しているわよ？」

「ああ、信じられないね」

きっぱりと即答すると、ひどいわ、と言いながら彼女はくすくすと笑った。

その笑顔は無邪気な少女のようだった。

「今夜は満月よ。とても綺麗ね」

彼女はすらりとした腕を伸ばし、月を指差す。

「うん、今夜は明るい」

「それに静かだわ、不思議なくらいに」

「うるさいよりはいいけど」

彼女のどの呟きにも即答していると、彼女は何が可笑しいのか笑っていた。

月は燦然と輝き、地上をできる限りの力で照らしていた。いつもの月とは違って、はつきりと影ができる。満月はやはり輝きを増す。

「今夜は誰もいないの。旅行に行ってしまった。運が悪いなあと思っていたんだけど、それでもなかったわね。貴方が来てくれたから」

「僕にはそれほどの意味はないよ」

「いいえ」

彼女は迷うことなく首を横に振る。

「独りぼっちは寂しいもの。その時誰でも側にいてくれればいいの。独りよりは寂しくない」

「それは誰でもいいってこと？」

彼女は少しだけ返答に困り、苦笑しながら答える。

「そうね。そういうことかもしれないわ。気を悪くしてしまっただならごめんなさい……でも、できればもう数時間くらい一緒にい

てくれないかしら?」

その苦笑が、少しだけ寂しげだったので、帰るとはとても言えなかった。

分かっていたことだ。彼女のように美しいものの前で自分は、とても卑小なものなのだ。

「かまわないよ。どうせ暇だからね」

「ありがとう」

嬉しそうに微笑む彼女の顔を見ただけで十分だ。

「旅行とやらはいつまでなの? よければ帰ってくるまで毎晩ここに来てもいいよ?」

独りでいることがとても寂しそうだったので、僕は純粹な親切心からそう持ちかけた。

「明後日までよ。でも、大丈夫。今夜だけで」

「でも」

明後日まで、彼女が独りで寂しくここにいるのかと思うと、胸が締め付けられるような気がした。

「私は、今夜しか咲けないの。あと数時間で萎んでしまうから」

「え……」

萎む? 彼女が? これほど美しく咲いているというのに?

「私は二、三年に一晩だけ咲く花。私の命は今晚だけ。また長い眠りにつくの」

そんな特徴の花に、覚えがあった。

実物を見たことは今まで一度もなかったけれど

「月下美人」

そう僕が呟くと、彼女はゆっくりと頷いた。

「そう、夜に咲き、夜に萎む。それが私」

では

もう、会えないのだろうか。

「ご主人様に咲いたところを見てもらえなくて残念だったけど、貴方がいてくれたから十分だわ。ありがとう。たった一人でも私が咲いた姿を見てくれる人がいて良かった」

満足げに微笑む彼女の姿に、胸が打たれる。

そんなわけないだろう。

こんな自分で十分なはずがない。

「そんなわけない、こんな」

「ねえ、私は綺麗？」

僕の言葉を遮るように彼女が問いかけてきた。

「次に咲いた時に、ご主人様は綺麗だと褒めてくれると思う？」

その質問の答えは簡単だった。

月下美人。その名の通りに、彼女は輝く満月の下で美しく、誇らしげに咲いていたのだから。

「褒めてくれるよ。絶対に」

その輝く彼女に僕は惹かれたのだから。

「ありがとう」

にっこりと彼女は微笑み、そして僕も微笑みながら別れを告げた。きつと、萎んでいく姿は見られたくないだろう。

「運が良ければ、また二、三カ月後に咲くことができるかもしれないの。私にその力が残っていれば。その時　また会えるといいわね」

そうだね、と言いながらもお互いにその時が来ることはないと思分かっていた。

僕と彼女は違う生き物。

互いに夜の世界に住むものだとしても、根本的に違うのだ。

彼女のもとを去って僕はいつも行く蛍光灯の明かりを求めた。

僕らは光を好む。

輝き、燃えるものには惹かれずにはいられない、そういう生き物だから。

月を見ながら、いつそ月のもとまで行こうかと考える。

こんなに美しい満月の夜では人口の光はどれも霞んで見えるのだ。僕が彼女のもとへ羽ばたいたのはきつと 彼女がこの夜の世界で何よりも輝き、その一瞬に咲き誇る自分の姿に力を注いでいたからだろう。

だから彼女は美しいのだ。

次に彼女に会うことはないだろう。僕ら虫けらの命は短い。

その短い一生の中で、人工的な光以外の、彼女のような輝きに出会えたのだから 僕の人生は悪いものではなかったのかもしれない。

(後書き)

「ムーンライト・シンデレラ」は「月下美人」の英名です。その響きが気に入って、この物語ができました。

読んでくださった皆様に最大の感謝を込めて、
本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4771c/>

ムーンライト・シンデレラ

2010年10月8日15時44分発行